
Lorelei

流羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o r e l e i

【Nコード】

N 6 2 0 7 V

【作者名】

流羽

【あらすじ】

ローレライ

L o r e l e i―美しい容姿とその歌声で人を惑わせる古代の魔物―

物語は、音楽に興味のない辻裕聖が、現代に生きるローレライと言われる天才歌姫、霧沢鈴音の歌を聴き、涙を流したことから始まる。

処女作です。よければ見てやってください。

誤字脱字あるかもしれませんが、よろしく願います。
更新が恐ろしく不安定です。

登場人物紹介

主人公 辻裕聖 つじゆうせい

中2 14歳 157cm 35kg 男 5/13誕生日

容姿端麗、運動神経抜群だが、バカなのが玉に傷。

かなりもてるが一切興味なし。ヴァイオリンが唯一の文学系得意技で、テレビに出たこともある。

リーダーシップをとるのが得意。動物が大好き。

困ってる人を見ると無性に助けたくなる優しい人。

熱血漢。ポジティブ。

霧沢鈴音 きりざわすずね

中2 13歳 150cm 30kg 女 12/24誕生日

才色兼備の天才歌手。運動が唯一の苦手。その他は

すべてできる。常に冷静で、ときどき混沌の

真っ暗なオーラをまとう。笑顔を見せることは

めったにない。目立ちたいと思わず、結果を

大事にする。流行に信じられないぐらい疎い。

好物はカレー。

辻裕輔 つじゆうすけ

中2 14歳 165cm 39kg 男 5/12誕生日

裕聖の一卵性双子の兄だが、裕輔は午後12..59分。

裕聖は午前0..0生まれなので生まれた日が違う。

裕聖と違うところは頭脳明晰だということと、楽器は弾けないということ。冷静で女性をエスコートできる。

霧沢鈴音の大ファン。霧沢のことになると燃える。

得意科目は、理数系。

辻夏樹 つじなつき

高1 16歳 175cm 45kg 女 6/25誕生日

裕聖たちの姉。バスケット一筋。男にももてるが女のファンがその倍ぐらいいる。くよくよ考えないで簡単に考える。裕聖たちのよき姉。言いたいことはズバツと言う。必殺顔面パンチは強烈。

辻聡子 つじさとし

47歳 183cm 60kg 女 10/10誕生日

裕聖たちの母。裕聖が1歳のときに夫を亡くし、それ以来母の手ひとつでみんなを育て上げた。おおらかで人の気持ちをよく察する。しかし、ときどき時を超越こえて話題が吹っ飛んだりする。

霧沢剛毅 きりざわこうき

50歳 167cm 78kg 男 3/24誕生日

鈴音の父。妻は蒸発。小太りの中年男。有名大手企業『f o g』の社長。人のコントロールがうまい。なんでも金で解決しようとする。

登場人物紹介（後書き）

では、本編をお楽しみください

T r a n s i e n t M u s i c (前書き)

できれば、登場人物紹介をよんでからのほうがいいと思います。
では、本編をお楽しみください。

Transient Music

それは、いつ消えたのかわからないぐらいに空気に溶けていった。
続いて割れんばかりの拍手。

―まだクラクラしてる。：ああ、もう終わったんだっけ。

気づいたら、頬を涙が伝っていた。ないてたんだ。初めて聴いたオペラで涙を流すなんて…。右を見ると、兄も涙を流していた。ここは京都コンサートホール。僕らは、生まれも育ちも東京。なぜ京都なんて遠いところになんで来たのか。今から数週間前のこと。



とうとう夏休みが来た！ いっぱい遊んでいっぱい食べていっぱい寝るぞ！

そんな夢は、母のこの仕打ちによって打ち碎かれた。

「冗談だろ？ なんだよ、このスケジュールは！」

裕聖は、おきたときに額にセロテで張られてあった紙を手にして母に詰め寄っていた。内容はこうだ。

夏休みのスケジュール

午前六時から午前七時まで	起床 洗顔 食事
午前七時から午前十時まで	宿題
午前十時から午後十二時まで	ヴァイオリン
午後十二時から午後一時まで	食事
午後一時から午後三時まで	スイミング夏期講習
午後三時から午後七時まで	塾夏期講習
午後七時から午後八時まで	食事 風呂
午後八時から午後九時まで	復習予習
午後九時	就寝

「あら、裕聖がまただらだらすごすのが目に見えてるからスケジュールを立ててあげたんじゃない」

聡子はニコニコと笑う。裕聖はあきれてぽかんと口をあけた。

（問題はそこ？そこなの！？）

「そーじゃなくって、いくらなんでも厳しすぎだろこんなの！僕、疲労死するよ」

「あら、そんなぐらいで疲労死するなら母さんや夏樹たちはもう死んでるわよ」

「うっ…け、けど裕輔はがんばってない！僕にこんななら裕輔にも！」

「だってあの子全部できてるじゃない。ま、あたりまえね。要領がよすぎるんだもの」

「つまり天才ってこと。裕聖はヴァイオリン以外裕輔にかなわないもんねえ」

裕聖と母のどたばた騒ぎを聞いたのか、夏樹が二階から降りてきた。

「あら、早いわね夏樹。今日もバスケットの朝練習？」

「うん。母さん、裕輔がうるさいんで殴ってきたんだけど」

「あらま。あの子ご褒美の券ですつごくはしゃいでいたからねえ」

「うん。気持ちはわからんでもないから手加減しといてやったよ。じゃね」

朝から交わされる非日常の会話。これが辻家には常識なのだ。

「姉ちゃん、日中症で倒れないでよね。それはそうと…ご褒美って何だよ！裕輔何もやってないのにご褒美とか理不尽すぎる！」

「あら、裕聖にもあげるっていったじゃない」

「…？いつそんなことを母が言った？…ああ、そうか。」

「母さん、いい加減勝手に時を超^{こえ}えないで」

うんざりした息子の声を完全無視して聡子がため息をついた。

「だから、このスケジュールを完璧にこなしたら、特別豪華ご褒美をあげるって言ったじゃない」

豪華ご褒美！裕聖の顔が一気に輝いた。辻家はかなりの貧乏家族で、

クリスマスプレゼントにはみんなでひとつの手動ゲーム機がせいっぱい。誕生日プレゼントには服をワンセットが普通だったのだ。もちろん裕聖もクラスの大半が持っているゲーム機をほしいとは思うが、家の家計状況を十分知っていたのでもんくはいわなかった。それが、豪華ご褒美だという。

「いやなら、やらなくてもいいのよ」

母のにやけた顔。しかし、裕聖はすでにトリップしてしまい、その顔を見ることはなくこのご褒美に釣られて、裕聖はOKを出してしまった。

そして、数週間。長い長い夏休みの試練を何とか乗り切った裕聖は今、おやつを目の前におかれ、待てをされている子犬のような顔で母からのご褒美を待っていた。

母は、エプロンのポケットから封筒を取り出し、裕聖に渡した。急いであける裕聖。中には、三種類計六枚の紙が入っていた。紫の『歴史博物館入場券』、白の『霧沢鈴音コンサート入場券』、そして、

「京都↑↓東京往復飛行機乗車券…」

「どう？豪華京都三泊旅行セットよ！ホテルはすでに予約してあるし、おこずかいも少しだけあげるし—」

裕聖は、なんともいえなかった。

（博物館…コンサートとかまったく興味ないし…けど、これ、かなり高かったんだよな）

そうだ。貧乏な僕らにとっては、最高のおくりものじゃないか！

「ありがとう、母さん。でも、なんで二枚組みなの？」

「裕輔も行くからよ。あなた一人じゃ心配でしょ？」

…そっか、そうなるよな。そういえば裕輔、この霧沢鈴音って人の大ファンだっけ…。まあ、夏樹姉ちゃんじゃないだけましかな。

「…存分に楽しんでくるよ」

そして、数日後。一日目は霧沢鈴音のコンサート。そして、冒頭に至る。

Violinist

終わったな。ほんとに一瞬だった。僕、ファンになりそう。

そんなことを思いながら裕輔の後を歩いていた裕聖は、ふとまったく知らないところにきていることに気がついた。

「裕輔、どこ行ってんの。ていうか、ここどこだよ？」

「当たり前だろ裕聖。出待ちだよ。出待ち！」

：はあ？学校では気持ち悪いほど紳士ぶってる裕輔が出待ち！？そんなストーカーじみたことを裕輔が！

「：裕輔、お前ってヤツは：」

「何だよ」

「：言葉が見つからない」

『猫かぶり』などの言葉は裕聖の薄っぺらい国語辞典には載っていなかったようだ。

そして、待つこと五分。しびれをきらした裕聖が言った。

「裕輔、違う所から出たんじゃないの？僕もう腹減った―」

「：なにしてるん？」

透き通った声。

「うわっ！」

あわてて飛びのいた裕聖は、後ろを振り返って息を呑んだ。

「き、霧沢さん？」

「そうやけど」

綺麗だ。裕聖の第一印象がそれだった。舞台では遠くからだったので、顔などはあまりわからなかったが、まじかで見ると霧沢がとても綺麗なことがわかった。

すっと通った鼻筋に切れ長の目と綺麗に整った顔。背は裕聖より少し小さいぐらいだろうか。すっきりとした体系にシンプルな白のドレスがよく似合っている。どこから見てもヨーロッパ系。だが普通に関西弁をしゃべっているのになぜかふいんきにあっている。

「霧沢さん！」

どんっ

「うおっ」

裕聖は床に倒れた。

ちくしょう、油断した。裕輔はときどきこうやって押しのけてくるが、たいてい僕はかわせた。しかし、今は霧沢さんに見とれてかわせなかった。はっ。今のでわれにかえた。僕は女にまったく興味がなかったはずなのに、見とれるとは。こやつ、只者ではないな。わかってるけど。

一人で百面相している弟をほうって裕輔は霧沢にぺらぺらとしやべりかけていた。しかし、霧沢は展開のあまりの速さについていけないのか呆然としている。

「裕輔！落ち着け。僕から言われるなんて相当だぞ」

「：はっ。すみません霧沢さん。少し興奮しすぎました」

「：別にいいけど。何の用？」

自分を取り戻した裕輔はすっかり紳士モードに入っている。そんな裕輔の切り替えの早さに裕聖はあきれた。

「ーと、いうわけです」

なんと！自分が出待ちしたことを包み隠さずしゃべった！ここら辺の潔さは認めてやろう。

兄に向かって上から目線な裕聖。しかしこっちがどんな反応をするか…。

「ふーん」

：それだけ！？ク、クールだ。クールをとおりこして絶対零度並みじゃないのか、この人の感情。

「なあ、そっちのちっさいほうの人」

「：僕？」

「そ。君」

ちっさいほう：まあ確かに裕輔には負けてるけどね。

「僕は裕聖。名前は覚えてください」

「うん。裕聖って、ヴァイオリニストやろ」

「えっ！何でそれを」

「テレビに出てた」

「テレビ…。あ。あれか」

以前裕聖は『天才キッズテレビショー☆』という番組に出たことがある。『天才小学生ヴァイオリニスト』として。そこでプロデビューしないかというスカウトも受けたのだ。結局断ったが。

テレビに裕聖が出ることを裕輔はひどくうらやましく思っていた。俺は勉強も運動も裕聖よりできるのに、なぜ音感には恵まれなかったんだ。それ以外全部できるのに。しかし、裕輔はいくらがんばっても裕聖をこえることはできなかった。今はもう、それ以外でトップであるようがんばっている。…要はあきらめたのだ。

「裕聖のヴァイオリン、すごい綺麗やった。けど裕聖、東京育ちって聞いたけど」

「うん。裕輔と旅行」

「…双子なんや。すごい似てる」

「うん。僕が弟」

「兄弟って、楽しい？」

「うーん。まあまあにぎやかだよ」

「…いいな」

もともと無表情でしゃべっていた霧沢だが、少し表情がかげったような気がした。

沈黙。すると、それを破るようにばたばたと足音がした。

「鈴音！」

「…父さん」

「父さん？」

走ってきたのは、中年の太った男だった。汗をかきながら、ばたばたと駆け寄ってくる。

「そこにいたんか。探したで、いつまでたってもきいひんから。で、この子らは…ん？」

「すみません。俺ら、一ファンです。霧沢さんと、少し話をしていたのですが。待ち合わせを遅らせてしまったようならごめんなさい。――ほら、裕聖！」

「えっ…すみません」

不本意ながら挨拶を済ませる。

「や、それよりさ、君ヴァイオリニストの裕聖ちゃんか」

「あ…はい」

「ああやっぱり！ いっやー双子がいたんか。めっちゃにてるなあ」
なれなれしく話す男。勝手に裕聖の手を取りぶんぶん振り回している。

「や、しかし鈴音と君、同い年やったなあ。確か」

「そうなの？ 裕輔」

「ああ。俺らと同じ中2だ。ですよね、霧沢さん」

「…うん」

「どうや？ 二人でデュエットしてみいひんか？ 明日のコンサートの特別ゲストとしてやな。もちろん負担は私らがおうで。どうや？」

…いきなりだな。突然だな。早いな。だけど、僕もちょうどおなじことを思ってたし、ヴァイオリンは練習しようと持ってきてたし…いいかな。

「もっちゃんいいですよ！ うちのバカ弟好きに使ってください」

勝手に決めるなバカ兄貴。どうせ僕を使って霧沢さんとお近づきになろうという魂胆なんだろうよ。

裕聖はため息をついて、言った。

「明日、ですね。いきましよう」

Duet

『ただいまより、歌手、霧沢鈴音さんと、ヴァイオリニスト、辻裕聖さんの演奏を始めます』

無表情な女の人の声が会場に響く。そして、幕が上がると同時に起こる割れんばかりの拍手。

裕輔がステージのまん前でうらやましそうに見つめる中、裕聖と鈴音はステージの真ん中へ歩き出した。ふと裕輔は弟の手を見て、頭を抱えたくなった。裕聖は昔から極度の緊張や怒りなど、とりあえず激しい気持ちを抑えるときに親指の爪を人差し指に強く押さえつける癖があった。その力は異常に強く、人差し指から血が出るときがあるのだ。さらに、緊張しているときの裕聖は、冷静な判断が取れず、失敗してしまうことが多い。

もし失敗して霧沢さんに恥をかかせてみる、ぶんなぐってやる！殺気ともいえるオーラをこめて弟をにらみつける。

するとどうだろうか。裕聖が指を開いた。まさか俺の殺気が届いたのか！？しかし、幾分リラックスしているような感じの弟を見て、これは大丈夫だろうと胸をなでおろす兄であった。

裕聖が、ヴァイオリンをかまえた。鈴音の口が開くと同時に、ヴァイオリンからも音が流れ出す。

「ave maria gratia plena domini
s tecum」

曲は、アヴェマリア。

季節やイベントなどでまったく違ってイメージが違うのだが、皆そのことに気づきもせず、ただ聞き惚れていた。鈴音の儚く透き通った声と、裕聖の力強く優しい音色。二つの音が混ざり合い、とけて、しみこんでゆく。皆恍惚の表情で舞台の上の二人を見つめる。

ふん、なかなかやるじゃん。

裕輔は少し複雑だった。

「I n u n c e t i n h o r a m o r t i s n o s t r
a e a m e n」

静かに、静かに消えていった。

ワアアア…！

喚声と拍手が巻き起こる。二人は軽く礼をし、舞台袖に消えた。

Backstage

裕聖が楽屋の扉を閉めながら大きなため息をついた。

「いや、あっけなく終わったなー。その割には疲れた…」

「……そりゃ、アヴェマリアやし。アンコールのミニステージやったし」

一呼吸遅れて鈴音がつぶやいた。

(…根暗か?)

たしかに、どんよりした顔してるし、うつろな目してるし…。根暗か。

裕聖が椅子に座り、キャラメルでも食べようかと鞆をあさっていたそのとき。

どすどすどす。

ん？あの大きな足音は…。

「鈴音、辻くん！よかったで！大反響や！がっぱり大もうけやで！」

「霧沢のお父さん！」

ああ、やっぱり。たしかに太ってるけど、あんなに大きな音が出るんだな、たかが足音で。

ぱたぱたぱた。

お？今度は軽い足音だな。スタッフか、ゆうすー。

「裕聖ーッ！」

「うおっ」

楽屋のドアを蹴破って、いきなり裕輔が殴りこんできた。間一髪のところまで避けた裕聖は目を見開いてロッカーに突っ込みかけた兄を見た。

「なんだよいきなり。僕、気に障ることした？」

「ああしたともさ！シラをきるな！」

「はあ！？分け分かんないんだけど」

「お前、霧沢さんと手をつないだだろ！」

「はあ！？何をどう見てどう考えたらそうなる！」

「シラをきるな！！」

裕輔の言い分はこうだ。

裕聖の緊張を解くのは難しい。しかし、何故すぐに緊張が解けたのか。まさか、裕輔の殺気が届いたなどバカなことはあるわけない。ではなぜか。それは、鈴音が裕輔には見えないほうの手を握ったからだ！

「どうだ！」

「どうだって、裕輔、お前…」

「なんだ」

「バカだな」

「はあっ！？」

「…思い過ぎしゃ」

「え？」

鈴音の静かな声に裕輔もいくらか落ち着いた。

「裕聖がすごい緊張してたから、わたしが『大丈夫？』ってゆっただけ」

「え…あ、そうですか…」

気まずいふいんき。それを打ち破ったのは、霧沢父の、この一言だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6207v/>

Lorelei

2011年10月9日12時27分発行